

『東京外語会会報』原稿

恩師、鐘ヶ江信光先生を悼みつつ

東京外国語大学元学長（国際教養大学理事長・学長） 中嶋 嶺雄

去る二〇一二年一月五日午後一時一〇分、東京外国語大学名誉教授(中国語)で元学長の鐘ヶ江信光先生が千葉県佐倉市のゆうゆうの里で満百歳のご長寿を全うして逝去された。クリスチャンであられた鐘ヶ江先生のご意思で、葬儀は近親者のみで厳粛に行われ、私は翌六日のお通夜に参列した。七日の葬儀には同級生の榎本英雄君（C35/明治学院大学名誉教授）に私の弔辞を代読していただいた。

永く母校での教育・研究と大学行政に貢献され、同時にわが国の中国語学界の最高権威者であられた鐘ヶ江先生は、一九一二（明治四五）年に大阪でお生まれになり、一九三三（昭和八）年に東京外国語学校の支那語科を最優等の成績で卒業された。卒業の翌年には山口高等商業学校（現山口大学経済学部の前身）の助教授として赴任され、四年後には教授に昇進されている。同校が山口経済専門学校となった戦時中を山口で過ごされたこともあってか、当時をしばしば懐かしそうに語られていた。戦後の一九四六（昭和二一）年に母校の東京外事専門学校教授として着任され、母校が新制大学となった一九五〇（昭和二五）年には東京外国語大学助教授、一九五八（昭和二三）年に教授に昇任された。

鐘ヶ江先生は大学行政にも大変なご尽力をなされ、一九六五（昭和四〇）年に学生部長、大学紛争中の一九六九（昭和四四）年には小川芳男学長の辞任を受けての学長代行（学長事務取扱い）を経てのち、一九七一（昭和四六）年四月一日に東京外国語大学第四代学長に就任され、紛争の余波が残る大学運営にご苦勞された。永年の名テニス部長も私に譲られて一九七五（昭和五〇）年に退官され、名誉教授とされたが、同時に中国語学会理事長を三年間お務めになり、母校退官後も京都外国語大学、さらに神田外語大学で教鞭をとられ、特に週一度の京都市行きを楽しんでおられた。

鐘ヶ江先生には、戦後初の『中国語辞典』（大学書林、一九六〇）や講談社現代新書の超ロングセラー『中国語のすすめ』（一九六四）などの名著があり、晩年もご著作に励んでおられたが、五年前に静子夫人がお亡くなりになってからは、やはりお淋しいようであった。

私が鐘ヶ江先生に初めてお会いしたのは、入学試験の面接であった。私が入学した一九五六（昭和三一）年の頃は、入試に面接があり、「なぜ外語を受験したのか」と当然のような質問をされた。それに対して高校時代に山岳部にも所属し、

串田孫一さんの名著『若き日の山』にすっかり魅せられていた私は、「外語には串田孫一先生がおられるからです」とお答えしたことをよく覚えている。こうしてフランス語で受験した私が今度は中国語を勉強することになったのだが、当時の学科名は中国科（正式には六部一類）であって、約四〇名のクラスに女子学生は四名のみであった。私たちが入学した時から先生はNHKのラジオ中国語講座を以後一二年間も担当されていたので、それで鐘ヶ江先生に親しまれた方も多と思う。新入生の頃は毎時間小テスト付きの長谷川寛先生の怖い授業に戦々恐々であったが、鐘ヶ江先生には中国言語学概論、商業通信文なども教えていただいた。

卒業後私は民間の研究所を経て東京大学の大学院に進んだのだが、その頃出版された講談社の『現代思想辞典』（一九六四年）に中国関係の項目を執筆したところ、早速お電話をいただいて褒めてくださった。二度と大学の門をくぐるまいと思つて卒業した私が大学院博士課程を中退して母校の助手になるというめぐりあわせも、鐘ヶ江先生や伊東光晴先生のご推薦によるものと思われるが、やがて大学紛争では若輩の私が教授会代表委員を務めることとなり、東大や教育大が入試を中止した時の坂田道太・文部大臣との交渉にも先生とご一緒させていただいた。

鐘ヶ江先生とのご厚誼をいただいたなかで、特に忘れがたいのは大学紛争時の四十八時間にわたる大衆団交に耐えて、先生とともに二人きり、早朝の教室で涙を流し合ったことでした。先生！どうか安らかにお眠りください。

FAX 03 1 5842 1 8377

東京外語会
会報委
野田合会
野田合会
野田合会

取り急ぎ
連休明け
T-FAX 野田合会

すめらみ 国際教養会大

tel 011 8811 5920

中嶋 加

Mail 2